

令和7年5月30日発行



五小だより

学校だより 6月号
東久留米市立第五小学校
校長 古矢 美雪



受け継いだ 五小の伝統

—さらに 新たな一歩へ—

校長 古矢 美雪

先週の土曜日の運動会には、多くの保護者の皆様、地域の皆様にご来場いただきまして、誠にありがとうございました。天気予報によると、雨がいつ降り出すか、という厚い曇り空の日でしたが、開会式から閉会式まで雨が降ることなく、むしろ、800人の子供たちのパワーと、保護者・地域の皆様の大きな大きなご声援とで、雨雲を吹き飛ばした盛大な運動会でした。

子供たちは、今回の運動会のスローガンを、「最後まで全力 受けとったバトンで 踏み出せ あらたな一歩」と決めました。その通り、5月になり運動会の練習が本格化してくると、どの学年の練習からも、全力で取り組む様子がよく伝わってきました。休み時間には、積極的に自主練習に励む子供たちの姿がありました。「演技が上手になりたい。もっと高みをめざしたい。」という意気込みが表れていました。学年全体の練習では、「がんばるぞ!!」「オー!!」と、気合を入れ合う子供たちの声が、校庭に響き渡り、互いに励ましながらやる気がみなぎっていました。その甲斐あって、どの学年も、手前味噌ですが、その学年なりの立派な演技・全員リレーでした。

低学年は、ダンスを踊る姿がとてかわいらしく、手にもっていた色とりどりの飾りやスカーフが、彩りを添えていました。折り返しリレーも、次の走者が身を乗り出して前の走者からリングバトンを受け取ろうと、一生懸命でした。

中学年は、低学年の頃よりも力強さが増して、集団としてのまとまりが感じられました。踊りの場面での隊形移動もキビキビとしていて、躍動感が伝わっていました。全員リレーでも、バトンの受け渡しをする姿は、真剣そのものでした。

高学年は、凜とした美しさが際立っていました。5年生のソーラン節、鍛え抜かれた踊りとかげ声には、たくましさがありました。6年生の有終の美は、子供たちが互いを信じて支え合いました。かけ声をかけて自分を仲間を鼓舞しながら、難しい技の成功に挑んでいった姿がありました。まさに最後までやり遂げた、有終の美、の姿でした。高学年の、練習に練習を重ねた全員リレーでのバトンの受け渡しは、美しさに加え、互いを思いやる温かささえ感じました。

五小の伝統は、「何事も明るい笑顔で、一生懸命に全力を尽くす」ことだと私は思っています。これは、昨年度の創立60周年の活動の場面で、愛校心とともに、この伝統を皆で確認することができました。今年度は、61年目という、新たな一歩を踏み出しましたが、**五小の伝統**は途切れることなく受け継がれています。今後も、先輩の後ろ姿を見ながら、後輩が受け継いでいってくれることでしょう。愛校心といえば、今春に卒業していった中学生が運動会当日に来てくれて、混み合っている保護者の鑑賞スペースを上手に誘導してくれたり、終了後は、体育館のシートや用具の片付けや体育倉庫をきれいに片づけてくれました。ボランティア精神にあふれる素晴らしい中学生になってくれたことに、思わず目頭が熱くなりました。

また、今年も、ボランティアの保護者の皆様に、朝早くからお手伝いをしていただきました。800人の子供の命を守る40張りのテントを1張りずつ安全確認をしていただいたり、終了後は教員が子供たちの学級指導をしている間に、声をかけあって後片付けをしていただきました。さらに今回は、校舎2階のテラスを参観席として開放したので、40名近い方々が誘導係に名乗りをあげていただきました。保護者の方々が、これほどまでに協力してくださったこと、これも受け継がれてきた、とてありがたい**五小の伝統**であると、心から感謝申し上げます。